

---

# アミル

金澤 樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アミル

### 【Nコード】

N0708Q

### 【作者名】

金澤 樹

### 【あらすじ】

地平線の彼方まで草原が続く国イハスクス

ヒンバル族の娘、アミルはヒンバルーと名高い戦士の母ヒスイと、優しい父トウキに守られながら日々穏やかに暮らしを送っていた。

しかしある日、ヒンバル族は黒ずくめの装束の集団に襲われ虐殺の憂き目にあうことになる。

## プロローグ？（前書き）

更新頻度は悪いと思いますが・・・

完結させたいなあ・・・

一応プロットは完成してますがはてさて・・・

## プロローグ？

満天の星空が頭上を埋めつくしている。

見渡す限りに広がる草原は幻想的な光りで照らされ、地平の輪郭をうつすらととらえる事ができた。

アミルは冷たい空気を胸一杯に吸い込み、吐いた息が白く彩られる様子を興味津々といった様子で見つめていた。

なぜ見る事ができるのに掴む事ができないのかしら。頭に浮かんだとりとめのない疑問に流されるままに白い息に伸ばした手は、むなしく空を掴むばかりだった。

長老のユルグに聞けば答えてくれるだろうか。ついこの間も、なぜ息が白くなる時とならない時があるのかを質問したばかりだ。あんまりしつこく質問ばかりしていたら失礼にはならないだろうか。

そう考えてアミルは頭に浮かんだ疑問を無理やりに振り払うと、自分が立つ小高い丘のふもとへと目を向けた。

そこにはディットと呼ばれる幕家が無数に佇んでいる。遊牧民であるアミル達ヒンバル族の我が家であり、宝でもある。分厚い布を簡素な骨組みにかぶせて作るディットは、夏場の夜に我慢が出来ないほど蒸し暑くなる事を除けば、強烈な太陽の日差しを防いでくれたり、冬場には火の暖かさをしっかりと保ち続けてくれたりと、快適な事この上なかった。

普段であれば冬を目前にしたこの時期の夜遅くなどに、一人丘の上で立ちつくしてなど居たくなかったが、今のアミルにとって自分のディットに駆け込むには少々都合が悪かった。

「ボーラブおじさん、まだ帰らないのかしら……」

今まさにディットの中で大人達が繰り広げているであろう会話の内容がアミルには煩わしくて仕方が無かった。ボーラブは気さくで会話が上手く、アミル自身も彼の事は好きだったが、手土産に持ってきた婚姻の話がアミルにとってはあまりにも唐突だった。

よくよく考えて見ればアミルも今年で16になるわけだし、むしろ今までに縁談が一つも持ち上がらなかった事の方が不思議なのかもしれない。つい最近も氏族の若衆が、アミルよりも年下の嫁をミブ族から迎え入れたばかりだった。

「はあ……」

アミルは小さくため息を吐くと、諦めたような顔をして立ち上がった。そろそろデイトに帰らなければ父さんと母さんが心配する。優しい父さんは夜に外を出歩いた自分を微笑むだけで許してくれるだろうが、母さんからは厳しい目線を向けられる事だろう。

自身がヒンバルで抜きん出た戦士でもある母、ヒスイからは、アミルも日々厳しい鍛錬を課せられている。まだアミルが小さかった頃に始められた鍛錬で一番初めに叩きこまれた事は礼節だった。何事にも義をもって臨み、何者にも忠をもって接する事。うんざりするほど繰り返された言葉ではあったが、今日のボーラブに対するアミルの態度はそれとは相反するものだった事は間違いない。元々が厳しい顔つきのヒスイが、一層目つきを険しくしているであろう姿を想像して、アミルは益々気が重くなるばかりだった。

## ブローグ？

イハスクス暦300年、獅子王ヴォルガ1世によって打ち立てられた大王国イハスクスは混乱の時代を迎えていた。建国された当時から、その領土をイハスクスの東西へと広げ続けたイハスクスは前王の時代に諸侯の分裂を招き、モルド王国、ハインツ教皇国、ジュード帝国の独立を許している。前王マルムーク4世は寛大王と賞賛される聡明な王であつたが、以前からのイハスクスの混乱を抑えきる事ができず、さらに、始めに独立を宣言したモルドへの肅清戦争で多くの民が苦しむ事を苦慮し、結局王軍を動かす事もなく死の床についてしまつていた。貴族諸侯の中にはマルムーク4世を腰抜けと馬鹿にする者もいたが、近年の腐敗した王達の中に置いては、最も平民に愛された稀有な王として実績を称える者も大勢いた。在位16年の中で彼は、形式化してしまつていた身分議会制を整備しなおし、全土の特権都市に布かれていた制限の多くを揺るめて経済の活発化をはかった。商業路の多くを各諸侯に警備させ、商人達は数年前には考えられなかつたほど安全に交易ができるようになった。税制も見直し、豊かになつた商人達を始めとして、同時に行われていた戸籍制を發展させてアミル達遊牧民からも正式に税を徴収し、王国の財政の健全化を図つた。

急速に国が甦つていく一方で、貴族諸侯は商業路の警備に必要以上の兵力を蓄えるようになる。肥大化した王国の細部に至るまでを、腐敗しきつた貴族に囲まれ、忠臣と呼べる友もないまま一人奮闘する王が把握しきれはらずも無かつた。マルムーク4世、享年48歳、多くの民が寛大王の死に涙したという。

## プロローグ？

「おお、アミル。どこに行っていたんだ。体も随分冷えたるう、こ  
っちへ来てすわったらどうだ。」

ボーラブに笑顔で声を掛けられたアミルは、少し気まずそうに微笑  
み返して簡易暖炉のそばへと近づいて行った。

「おじさま、大分飲んでいらっしやるみたいですね。」

「なに、まだ一甕程度だ、アミルに注いで貰う前に潰れる訳にはい  
かないからな。それを楽しみにして来たんだから抑えているほうさ。」

「  
そう言つて豪快に笑うボーラブに苦笑しながらアミルは新しい甕を  
引つ張り出し、にこにこと上機嫌に笑うボーラブに酒を注いだ。」

「アミル」

やれやれと腰を下ろそうとしたアミルに、よくまあこれだけ怒気を  
含めるものだと感心しそうなほど棘のある声がかけられた。

幕家に入ってからというもの、出来るだけそちらは見ないようにし  
ていたアミルだったが、恐る恐る声の主に目を向けた。

「はい… なんでするか母様…」

「なんでするか？ ではありませんアミル」

刺し貫かれてしまうのではないかと恐れを抱くほどの視線を、ビシ  
ビシとアミルにぶつける、アミルの母、ヒスイが表情に静かな怒り  
を湛えてそこに座っていた。

「折角ボーラブが訪ねてきてくれたというのに、フラリと外に出て  
いつて半刻も戻ってこなかったのはどういう事かしら」

「それは… その…」

「ぼそぼそ喋らない！」

「そ、その…！ ちよ、ちよっと気分が優れなくて外の空気を吸いた  
くなつて！」

「あら、私達の娘は少し気分が悪くなると礼節も度忘れして自分の

やりたいように行動する娘みたいよあなた」

ヒスイはアミルの苦し紛れの言い訳にはまったく取り合わず、眉をきつと上げて、先程から一人黙々と酒を口に運んでいる自分の夫に矛先を向けた。

アミルの父のトウキは片眉を僅かに上げてヒスイを暫く見つめた後、ため息混じりに杯を床に置いた。

「そうカリカリせんでも良いじゃないかねヒスイ。そりやまあアミルの態度は褒められたもんじゃないかもしれないが……。私達とボーラブとの仲じゃないか。ボーラブだってこうして気にしていない事を、君が気にし過ぎる必要は無いだろう」

「親しい間柄だからこそ、よ、トウキ」

ヒスイがそういうとボーラブはくつくつと小さく笑い、トウキの空になった杯に酒を注ぎ足しながら言った。

「良いんだよヒスイ、もうこの話題は終わりにしようかとも思っていたんだが、どうやら嫁入りの話はアミルにとっては急すぎたらしい。なに、氏族一の美人と名高いアミルの事だ、そう慌てなくても欲しい時に理想的な伴侶がすぐに現れる事だろうよ」

「ボーラブおじさん……」

「ちよつと、ボーラブ、気楽な事を言わないで。ただでさえアミルは普段から危機感が足りないのに、これ以上楽観的になられたら私達の頭痛が増すわ」

一瞬ボーラブの言葉に安堵した直後だっただけに、母ヒスイの容赦ない言葉はアミルにぐさりと突き刺さった。

思わずシュンとなって下を俯いてしまった。

わかってはいるつもりなのだ。いつまでも寒い夜に息が白く染まる事に思いを馳せながら暮らしてはいる場合ではない。

アミルの家族は父のトウキ、母のヒスイ、そしてアミルの三人だけ。他のヒンバル族ではどの家族も15人ほどの大家族で、幕家の中はいつも賑やかであったのに、アミル達の幕家は随分と寂しい。

別に大家族に憧れているわけではなかったが、アミルが男でない以



上、トウキとヒスイが老いた時、アミル一人で三人の暮らしを支えていくのは相当無理があるように思われた。

早く若い夫を家へと迎え入れ、子を生み家族を成さなければ安定した生活は、いつか失われてしまうだろう。

頭ではわかっていても、自分でも不思議なほどに、縁談に対しての抵抗感が抜けなかった。

## プロローグ？

「まあそうかりかりするなよヒスイ。とにかく、今日は折角こうして酒を汲みかわしているんだ、辛気臭くなるのはよしとこうや。」  
そういつてカラカラと豪快に笑うと、ボーラブはトウキの持つ杯へと酒を汲み足した。

「・・・まあいいわ。でもアミル、縁談を受ける受けないについては私はあなたの判断に任せるけれど、今日みたいに自分の叔父に対して失礼を働いたら、次はゆるさないわよ。」

ヒスイにギンツ！と音がなりそうなほどの剣幕ですごまれたアミルは首をちぢ込ませ、きまりが悪そうに正座した足をもじもじと組み変えた。

「ところでアミル、今まで本当にどこに行っていたんだね？」

気まずそうに俯くアミルを励ましでもするかのように、トウキが優しくアミルへと話題を振った。

「おおそうだ、アミル。どうせまたお前の事だ、なにか外で面白い事でもしてたんじゃないか？」

いかにも楽しそうにボーラブにまで尋ねられ、トウキの気配りもむなくいよいよアミルは小さく縮こまってしまった。

そんな、話す事の程ではないのだ、とアミルは照れ笑いでも浮かべながらやんわりと話を逸らしたかったが、こういう状況ではそうもいかない。

斜め前ではヒスイが、これ以上アミルが失礼を働きはしないかとピリピリ神経を尖らせている。

叔父ばかりでなく父にまで尋ねられたことを答えないとすれば、やましいことでもしているのかとヒスイの怒りに油を注ぐのは目に見えていた。

かといって「息はなぜ白くなるのか不思議で、ずっと考えていた」などとトンチンカンなことをのたまっても、それはそれでヒスイの

怒りを買いきりそうだった。

「そ、その・・・星が・・・綺麗で・・・」

しどろもどろになりながら、なんとか嘘にならないように言葉を搾り出してみる。

「ああ、また裏手の丘に登ってぞろ星空で星座作りでもしてたのかい？」

トウキが優しげにそう尋ねると、アミルは救われたような表情でうんうんと首を縦にふった。

「ほほーその一人遊びは初めて聞くヤツだな。どれ、どんな星座を作ったか教えてみておくれ」

これまた楽しそうにボーラブが身を乗り出した。それをみてヒスイは頭がいたそうな表情をしたが、なんとか九死に一生を見つけたアミルはいつも自分が夜空に思い浮かべる空想の動物や、そして母ヒスイや父トウキの星座を作った事まで次々とまくしたてた。

## プロローグ？

「ははは！ヒスイ、良かったじゃないか。お前もついに星空に輝くまでになったようだぞ。さぞや勇ましい格好でいることだろうな。」

ボーラブが豪快に笑うと、ヒスイは眉をひそめてそちらを睨んだ。  
「失礼ねボーラブ、私の星座ならきつとおしとやかにしているでしょうよ。それより今度ボーラブの星座でも私が作っておいてあげるわ。手に持つものは酒瓶で良いかしら？それとも酒樽の方がお似合いかしらね。」

「こりゃきつい事言うな。これでも最近嫁に言われて控えているほうなんだぜ？ああ毎日小言ばかり言われた日にゃあ、こうして気楽に飲める場でもないかぎり胃に穴が開いちゃうよ。なあ、トウキ。」

「そういわれてもなあ・・・。それに、なんだかその言い草じゃあアミルに縁談を持ってきたというよりは、それをネタに酒を飲みにも来たみたいだぞボーラブ。」

トウキがそう言つと、それまで不機嫌そうにしていたヒスイもころころと笑い、生きた心地がしなかったアミルもやつと穏やかな気持ちになることができた。

結局その日は夜がどつぷりと更けるまでボーラブと4人で過ごしたアミルは、ようやく横になった布団の暖かさをかみしめながら、うつらうつらとまた考えることに思いを馳せていた。

ボーラブに話した自分の星座たちのこと、唐突に（といっても今まで出てこなかった事が不思議なほどだったが）持ちかけられた縁談のこと、抱き付いてしまいたくなるような表情で微笑む父のトウキやヒスイのこと。

様々なことが眠りにおちそうな頭の中でグルグルと巡っては溶けていく。

アミルは眠る前のこの考え事の習慣がたまらなく好きだった。

この考え事のせいで翌日寝不足になることもしばしばだったが、もう癖のようになってしまっていたので今更やめようとも思わなかった。

「結婚・・・か・・・。」

口に出して呟いてみると、何ともいえない違和感が自分の中に広がっていくのを感じる。

父や母に、このことについて急かされたようなことは今までに一度もなかった。もちろん今日の話もトウキやヒスイは無理にでも受けさせようなどとはしてこなかった。ヒスイが怒っていたのもあくまでボーラブを放っておいて逃げ出したことに対してであって、縁談を嫌がったことに対してではない。結婚に関しては非常に放任主義な両親であった。

そのせいもあって、今まで一度も真剣に考えるようなことがなかったのだが、もうそろそろそんなことも言っていられない年になっていることが痛いほど身に染みた。

「やっぱり、しなくちゃ駄目なのかな・・・。」

アミルは父と母の三人で暮らす今の生活がたまらなく好きだった。子が欲しくないわけではない。

きっと自分に赤ん坊が生まれれば、やはり父や母と同じようにたまらなく愛おしいのだろうと思う。

ただ、アミルは嫁入りをして、大好きな父や母と離れることが堪らなく寂しかった。

## プロローグ？

「・・・アミル、眠れないの？」

「・・・かあ様？」

布団に入ってからもう随分と時間がたつ。父も母もとくに眠りについたものだと思っていたアミルは、ヒスイがまだ起きていたことに少なからず驚いた。

アミルの寝つきが異常に遅いということもあつたが、少なくとも今までこんなに母が寝付いていないという記憶はアミルにはなかった。自分と同じように、なにか考え事でもしていたのだろうか。

「ごめんなさいかあ様、起こしちゃったかな。」

「・・・いいえ、少し考え事をしていたのよ。アミルこそ大分長いこと寝つけないでいるのね。」

そう潜めた声で言いながら、アミルの隣で体を横にしていたヒスイは静かに体を起こした。

少し何事か考えるようにしてアミルを見つめたヒスイは、やがてそつとアミルの頭に手を添え、アミルの長い髪をすくように撫ではじめた。

ヒスイの手はさらさらとしていて、アミルは思わずうつとりするほどに心地良かった。

綺麗なかあ様・・・。

性格は男勝りだし、武芸でも一族にはヒスイに並ぶものなどいないほどであつたが、何よりもヒスイは娘のアミルからみてもため息が出るほどに美しかった。

一族の中でもトウキはよく羨ましがられたり豚に真珠だとからかわれたりしていたが、たまに山羊を売りに街に降りると余計に凄く、街行く人々が必ず振り返るほどだ。

本人が礼節や作法にうるさいことも相まって、立ち振舞いもどこかの貴族の女性がお忍びで街に降りてきてでもいるかのようだった。

「アミル……。」

「はい、かあ様。」

ヒスイはアミルの名を呼んだものの、何か言うことを躊躇ってでもいるかのように、そのまま黙り込んでしまう。ただ髪を梳く音だけになり、アミルは珍しく何事か言い淀む母の顔を不思議そうな目で見つめた。

「どうしたの、かあ様。」

そう聞くと、ヒスイはまた暫くアミルの髪を無言で撫でてから静かに微笑んだ。

心の中が暖かいもので満たされていく程に慈愛に満ちたその笑顔に、アミルは思わずうっとりと見惚れてしまった。

「いいえ、なんでもないの。何か、あなたに話しておいてあげようと思ったのだけれど……。忘れてしまったわ。」

「……変なの、かあ様。」

そう言つてアミルもヒスイに微笑みかける。

「ねえかあ様、じゃあ私から聞いてもいいかしら。」

「なあに。良いわよ。」

「かあ様ととう様って、どういう風にして結婚をしたの。」

そう聞くとヒスイは少し驚いたように目を開いたが、すぐさまクツクツと小さく笑い声をあげた。

「なあに？なにが面白いのかあ様。」

アミルが不思議そうにみつめると、ヒスイはまた穏やかな微笑を浮かべながら静かに首を振った。

「いいえ、なんでもないわ。・・・そうねえ、どこから話してあげたらいいやら・・・。」

「初めて出会った時の話が良いわ、かあ様。」

「そう・・・、それじゃあ、何か羽織って外で星でも見ながら少し話をしてあげましょうか。ここで話しているとトウキを起こしてしまうわ。」

アミルはすっかり眠気のとんだ瞳をキラキラと輝かせながら頷くと、いびきをあげるトウキを起こさないように静かに布団から抜け出し、ヒスイの手を握りながら満天の星空が輝く丘の上へと登っていった。



## プロローグ？

「綺麗ね……。」

そう呟いたヒスイは満天の星空を見上げながらため息をついた。

もう大分ながいこと、こうして星空をまじまじと見つめたことなどなかったように思う。

「アミル、さつきボーラブに話していた星座達はどこにあるのかしら。」

そう聞くと、アミルは嬉しそうに頬を上気させながら次々と星座の場所をヒスイに教えていった。

「あの場所にかあ様の星座があるのよ。」

アミルが指差す方向に顔を向けてみると、一際橙色に輝く大きな星が見えた。

「あの、橙色の星の場所？」

「うん、あの星。」

「そう……。」

その星の輝きは、なんとも暖かで、しかし凜としていてとても美しい星のように思える。

そんな星を自分の星座の中心に据えてくれたアミルの、自分に対する愛情が伝わってくるようで、ヒスイは心の中にアミルを愛おしく思う気持ちが溢れてくるようだった。

「ありがとうアミル。とても素敵な星だわ。」

そう言ってアミルの頭を優しく撫でると、アミルは嬉しそうに頬を染めてヒスイの腕に頭をすり寄せた。

「それでね、とう様の星座はその隣にあるのよ。」

「そう……。」

アミルは次々と星を繋ぎ合わせ、星座の形をヒスイに教えてくれた。なにせ満天の星達の話だったので、ヒスイにはアミルの思い描く通りの形を繋ぎ合わせられた自身はなかったが、二つの星座は仲む

つまじく寄り添い合っているように見えた。

ひとしきり星座の説明することに満足したアミルは、ねだるような視線をヒスイへと向けた。

「ねえかあ様。とお様とかあ様は、どうやって結婚したの。」

そう聞くアミルはまるで小さな子犬のようで、ヒスイは思わず微笑した。

「知りたい？」

アミルはすぐさまコクコクと頷く。

「知りたいわ。駄目？かあ様。」

「いいえ、駄目じゃないわよ。」

ヒスイは微笑みと共にアミルに静かに首を振ってみせた。

「そうね・・・かあ様がまだ赤ん坊だったところに、ユルグ様に拾っていただいた話はしっているわよね。」

「ええ、山羊を売りにいった街の片隅に、一人で・・・うんと・・・」

「そう、一人で、捨てられていたらしいわ、私は覚えていないのだけれどね。」

アミルが自分の横であからさまにシユンとした様子を感じた。きっとそんな話が出てくるとは思っていなかったのだろう。

自分の母の気持ちを傷つけたとも思っているのかもしれない。

「私は1人だった・・・。ユルグ様が拾ってくださらなければ、きっと今ここに私はいないでしょうねえ。」

「・・・。」

「私の一番古い記憶は、その話をユルグ様から聞いた時の記憶。きつと自分に父も母もいないことを不思議に思っ、教えてくれと駄々でもこねたのでしょうね。」

ヒスイはまだ幼かった頃の自分に思いを馳せた。

その時の情景こそ鮮明に記憶しているものの、何を感じ、思ったのかは覚えていない。

きっと、傷ついたのでろう。とても深く。

## プロローグ？

「だからかしらね、私は極端に友人を作ろうとすることを避けていたわ。あなたならよくわかるでしょう。季節と共にこの国をさすらつて暮らす一族の中で、誰とも絆を作ろうとしないことの危うさと、愚かさだ。」

「・・・かあ様は愚かじゃないわ。」

悲しそうな瞳でアミルがヒスイを見つめる。

「いいえ、愚かだわ。それで良いと思っていたことが何より愚か。助け合つていかなければいけないこの暮らしの中で、自分ひとりで生きていると勘違いしていたわ。・・・おかしいわよね、1人で生きているはずがないじゃない。皆が働いて、許してくれて、見守つていてくれたからこそ育つことができていたっていうのに。」

ヒスイは横で目に涙を浮かべてうなだれるアミルに微笑みかけ、柔らかに髪を撫でた。

アミルはよくわかつているのだろう。

自分が1人で生きているわけではないということ。

人に、ものに、動物に、草花に、星達や太陽に育てられて、今の自分があるということ。

自慢の娘だと、ヒスイは内心誇らしく思った。

「そんな風に捻くれながら暮らしていたある日、ユルグ様の山羊を追っていた私のところにトウキがやってきたの。」

「とお様が？一人で？」

「ええ、優しい顔でやってきてね。だけどその頃の私は随分と捻くれていたでしょう？そろいじめにでもきたのじゃないかと随分勘ぐったものだわ。」

「とお様は、どうしてかあ様の所に来たの？」

「山羊の追い方を聞きに來たの。変な人でしよう。その頃の私は随分と一族の中で敬遠されていたのに。」

「とお様は、山羊を追ったことがなかったの？」

アミルが不思議そうに首を傾げる。無理も無い。ヒンバル族の中で山羊を追うのは子供達の仕事だ。小さいうちに山羊を追ったことがない子どもなどいない。

「いいえ、トウキも上手に山羊を追っていたわよ。ただどうも、私の方が上手く追えていると思ったらしいのね。私には自覚はなかったけれど、まあ無理もないわ。族長のユルグ様がもつ山羊達だもの。気性が良い山羊が多かったとはいえ、トウキがその時追っていた山羊のゆうに三倍もの山羊がいたからね。」

「すごいわかあ様、私、ユルグ様の山羊を一人で追う自信なんかとても無いもの。きつとお様もかあ様に感心していたんだわ。」

ヒスイのことを誇らしげに思ったのだろう、アミルの目は先程とは打って変わってキラキラと輝きだしていた。

「そうでもないのよ。トウキもそうだけれど、他の家の子供達は弟や妹、赤ん坊の世話にも追われて大忙しだったのに、私には山羊を追うことしか仕事がなかったから。・・・まあいいわ。とにかく、そうしてトウキが話しかけてきた時が初めての出会いと言っても良いかもしれないわね。それまでも顔を見かけたことは何度かあったけれど。」

「それで、二人はどうなったの？」

話の続きが気になるようで、アミルはヒスイに早く早くとなだる。とても16歳の娘には見えないその姿にヒスイは思わず苦笑した。

## ブローグ？

「トウキはあの通り変な人でね。どんなに冷たくあしらっても何度も私が山羊を追っている所にやってきたわ。そりやもうしつこかったわよ。にこにこしていい人に見えるけど。トウキも存外捻くられていたわね。それで、あんまりしつこくてね、ある日とうとう私が癇癢を起こしてしまったの。いい加減にして頂戴！私は1人でいたいだよ！ってね。」

クスリ、とアミルが笑う。いつもヒスイが癇癢を起こしている姿を間近にみているアミルのことだ。若い頃のヒスイが怒っている姿が目に見えかぶようだったのかもしれない。

「そうしたらね、ひどいのよ。トウキったら。私の剣幕があんまり恐ろしかったのかもしれないけれど、しくしく泣き始めてしまったの。『ごめん、そんなにいやだなんて、思ってもいなかったんだ』ですって。」

アミルはコロコロと声をあげて笑った。

「それから、ぶつつりとトウキは来なくなってしまったね。また私は一人ぼっちに逆戻り。」

「とお様、いくじなしだわ。」

アミルが口を突き出してふてくされる。見ていて飽きない表情の變化のしようだった。

「とお様のこと、そんな風に言っではだめよ。」

微笑みながらそう諭すと、アミルは今度はシュンとうなだれる。

「でも、かあ様が・・・可哀想・・・。」

そう言っアミルは目に涙を浮かべる。ヒスイはアミルの頭を抱きかかえるように腕を回して静かに首を振った。

「いいえ、可哀想じゃないわ。自業自得よ。折角トウキが心を開いて向き合ってくれようとしたのに、余計なことはするなと叩き帰ってしまった私が悪いの。」

「・・・。」

「暫くはせいせいしたなんて思っていたのだけれどね、段々と、気持ちが悪くなり、落ちていって来た。わざわざトウキのディットを山羊を引き連れて歩いてみた。なんだか、とても寂しくなってきた。自分から拒んだくせに、いざトウキが話しかけにくくなくなると、もう一度話しかけて欲しくて堪らなくなったわ。」

「ホンの少しだけ、アミルが嗚咽を漏らす。気持ちが入り込んでしまったのかもしれない。」

「遠くにトウキが山羊を追っている姿がいつも見えていたわ。私は全然違うほうに顔をむけながら、遠目にトウキのことをずっと見ていた。意気地なしなのはトウキじゃないわ、私の方。素直に謝れば良いのに・・・。ちつとも勇気が湧かなかった。」

「ヒスイはそつとアミルの涙を指ですくってやった。」

「そうしてやきもきしながら過ごしていたらね、ある日ユルグ様に呼ばれたの。槍の演舞で勝負したいやつがおるそうじゃがってね。」

「・・・槍の演舞？でも演舞って・・・。」

「ええ、個人的にやるようなものではないわよね。年に1度、街の収穫祭に合わせて行われる演舞会で競い合って、一番美しく舞えた者が一族の代表として王の御前で他の氏族と共に披露する、とても神聖なものだわ。」

「うん・・・。」

「人に易々と見せるものでもないし、ましてや個人的に競い合うなんてやってはならないことだわ。その時の私もそう思ってたね。ユルグ様に大分ごねたの。でもユルグ様、笑っているばかりでちつとも取り合ってくれないの。結局私が折れてね。一体その物好きはどんなヤツだって聞いたのよ。」

「・・・とお様？」

「ええ・・・そう、トウキだったわ。今でもそのことを告げられた時に顔が一瞬で熱くなった感覚を覚えてる。でもその後にはユルグ様

がいった、演舞にかけるものを聞いて思わず噴き出してしまったわ。

「

「とお様は、何を演舞にかけたの？」

「『トウキのやつはな、お前に負けたと思ったたらヒンバルを離れるそうじゃ、ただな、もしもお前が負けたと思つたら……。』」

「思つたら……。？」

「『山羊の追い方を教えて欲しいそうだ』」

「へ？」

嫁になってくれというセリフでも予想していたのだろう、肩透かしをくらったようにアミルの目は点になった。

「トウキらしいでしょ？」

「それは……。とお様らしいけど……。。」

「嬉しかったわ。」

「そうなの？」

「ええ、だって……。それはもう」

プロポーズでしょう？

微笑むヒスイの顔は、幸せで満たされていて、まるで女神様のようだ。アミルは見惚れてしまった。

「……。その勝負、どうなったの？」

「……。秘密。」

クスクスとヒスイは笑う。

「……。ひどいわ、かあ様。」

「そう？ 今度トウキに聞いてみると良いわ。私からはもうこれ以上



教えない。」

「良いけど……。」

ブスツと唇を突き出してアミルはふてくされる。

「さ、今日の話はこれでおしまい。いい加減眠らなくちゃ。明日も・・。」

そう言っ立ち上がりかけたヒスイの表情が一瞬で、穏やかな微笑みから警戒をあらわにしたものに变化した。

その変化にアミルの心臓の鼓動が跳ね上がる。

「ど、どうしたの？ かあ様。」

「しっ、静かに・・。」

ヒスイはアミルの方には目を向けずに星明かりに照らされた、ヒンバル族の集落から遠くはなれた草原を睨みつけていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0708q/>

---

アミル

2011年10月6日13時54分発行